
命の器・魂の牢獄・心の在り処

アルル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

命の器・魂の牢獄・心の在り処

【Nコード】

N7513P

【作者名】

アルル

【あらすじ】

これは以前アップしていたものです。相方に因って強制的に削除されました。

あらすじは、タイトルの通り、其れ等に関する考察です。興味の有る方が居られましたなら、どうぞ御一読下されば幸いです。

（前書き）

文学というカテゴリーをしましたが、実際には其れに伴う考察です。物ではありません。なので、オチもなければ、盛り上がりも有りません。ですので、自身に比類するという方のみに役立つかもしれない。或いは、意味不明に映るかもしれないので、興味が湧いた方に読んで頂ければと思います。

人は、不思議な事に、心に鍵を掛けている。産まれ出るその時から。やがて、子は育ち、その鍵の存在に気付きゆく。しかし、その全てを開く訳ではなく、周りに群がる人間や、それによつて形成される社会、その形を作る宗教感、又、それにより構成される倫理観や道徳観に合わせてのみ、限定的に開く。つまり、完全に心を解き放つ人間はほぼいないと言える。だが、日々に追われ、次第に枯れていく心を癒すのに、鍵を開けない、即ち、心を開かないというのでは、おそらく、それは無理であろう。人が動物の本性として持つ独自のフィールドとは違い、心というものは無意識下にある事が多い。それに気が付く者と、又は、そうでない者、どちらが幸せであると言えるだろう。もちろん、前者だ。気が付いてさえいれば、いつか、その心を、鍵を開けた自らの全てを、受け止めてくれる誰かに出会えるかもしれないからだ。そうでない者には、その時は永遠に訪れないだろう。なぜなら、自分自身が何者であるかも認識し得ないからだ。そういう者同士での幸せは、所詮仮初にすぎない。或いは気が付いていても、自身に素直になれず、生涯自分を自身に対しても、又、一緒に居る誰かに対しても偽つていくのかもしれない。もしくは、鍵を開けるのは自分自身ではないのかもしれない。いつか、出会えるか、又はそうでないにしても、心に掛かる鍵を開けるのは、自身が大切に想い、守りたいと願う人物であるのかもしれない。

或いは、そう願う事で開き、その心を手にするのもかもしれない。もし仮に、そうであるのなら、自らが守るべき人、想うべき人に出会えた時こそ、扉は開くのかもれない。

そういう、つまり、自身の心の鍵を開け、ありのままの心を開放してくれる人に出会うにはどうしたら良いのか。おそらく、方法等はないのだろう。縁という言葉が有るが、それは果たしてどのよう

な人物に当てはまるのであろうか。誰も彼もがその糸を持ち得るのなら、銘々が手繰り寄せていけば必ず出会える事になるが、現実を見れば一目瞭然、そのような事は無い。かと言って、そのものを否定する事も出来ない。なぜなら、浮世に連ねる本物の物語の中には、現実にとつとしか考えられない現象、つまり、巡り合いがあるからだ。人はそれを奇跡と呼び、賞賛し、羨み、妬むが、実はそうではない。ただ単純に生きて、そして運良く巡り合うのなら、確かにそれは奇跡であると言えるだろう。しかし、実際に、奇跡的な巡り合わせを果たした者達は、両者ともにそのように怠惰な人生など送る筈がない。成るべくして成る奇跡というものも、この世界には有るのだ。それこそ、命懸けで毎日を生きて、毎朝目が覚め、視界に映るものを知覚し、その時に初めて、今日もまた、生きているのだと実感する程に、自らと、それを取り巻く環境に対して真剣で真摯な態度で現実に向かい合っている者ならば、自身の努力によって、周囲が奇跡と呼ぶ現象なり、事物、物事を能力の範囲内で操る事も出来るのではないか。そう思うのは、決して自惚れではないだろう。

一つ、問題として取り上げなければならぬ事がある。それは、そもそも、なぜ人は心に鍵を掛けて生まれてくるのか、という事である。何もかもが開かれていたのでは、確かに不便であるし、何より不自然であると考えられる。が、しかし、その事で一生をふいにしてしまったのでは元も子も無い。やはり、そうなると、運命的な、或いは、声を張り上げて求めた相手に出会う事では人は救われないのであろうか。

いや、やはり、肉体と精神とは別物であると考えべきなのかもしれない。脳による感情の制御とは別に、異なるメカニズムによって統制されているものが体の中か、或いは、この世界のプロトコルに束縛されないどこかに有るのではないか。それが精神であつて、つまり、心であるのではないだろうか。肉体とはつまり、この世界に於いて、自らを認識したり、その存在から成る事象を出力し、そこから得られる現象を自身に入力する事によって、そこから得られ

る情報に基づいて自らの言動のあり方を検討するという、サイバネティクスにも似たシステムを構築すべく与えられたものではなからうか。これを極単純に言えば、この世界に設けられているプロトコルに従って、他者との接触を可能とする為にある、という事だ。

この仮説が正しければ、一体肉体とは何なのだろうか。どう考えても心の障壁であるとは思えない。ならば、なぜ、そのプロトコルは整然と敷かれ、守られているのだろうか。

破る術等持たない事は言うまでもないが、なぜここまで回りくどいのか。神という存在があるが、これは彼、或いは彼女が人に与えた何かしらの罰であろうか。人と人が分かり合えないのは、一因としてこういった壁が有るからだろう。それが、生きる為に必要なこの世界の制約に殉じた、つまり、物質としての肉体であるというの、何と皮肉な事であろうか。争いにしても、また然り。肉体の違い、脳に刻まれた既成概念、それらが相俟って起こるのだから。

では、その障壁を突破するにはどうすれば良いのか。先に述べた通り、心、自身のそれと、他者のそれに対して正直であり、衝突を繰り返す中で互いを知り、認め合い、その事に因って、徐々に、極僅かずつでも互いの心を見つめ合い、自身で、或いは他者の力を借りる事で、無意識に掛けた鍵を開いていくしかない。無論、言うまでもない事ではあるが、自らの力のみで因って鍵を開ける事は不可能だ。なぜなら、自己を認識する上で、必要なものの中には、当然他者、即ち、他の人間の存在が不可欠だからだ。その条件を満たした上で初めて、自らの心に掛かるやっかいな鍵を開く事が出来るようになる。

しかし、実社会の中で、ここまで行き着く者が、果たしてどれ程いるのだろうか。否応無しに、日々、或いは個々の抱える何かに向かい、心というものを意識しながら、又、認識しながら生きていくのは、極めて困難であると言える。しかしながら、それこそが人としての営みであるのは既に言うまでも無く、それを困難であるからという理由で拒絶するというのなら、彼の者は人ではなく、動物とし

ての、人間というものである。即ち、あえて、困難な道を選び、かつ、人としての尊厳というものを理解し、その生き方を実践すべく、常に努力を怠らず、自らを驕らず、真摯な態度を以って他者に向き合う事の出来る者こそを、人と呼ぶべきなのだ。生真面目に捉えれば、ひどく難しく思うかもしれないが、実際にはそれ程難しい事ではない。なぜなら、我々は人なのだから。少なくとも、その能力を有しているのだから。

では、人ならざる者、つまり、人間は、心を持ち得るのだろうか。同じように生き、そして、やがて死を迎える彼らは、何を思い、日々の中でどのように人と向き合っているのだろうか。

仮に、心を持ち合わせていないとするならば、その行動の全ては脳に刻まれた情報によって行われている事になる。或いは、遺伝子によって、その行動が制御される事になる。

又、或いはe sに因ってかもしれない。心とe sとは別物であると考えられなくもないからだ。

しかし、これら全てが肯定されたなら、人間とは何と愚かでお粗末な存在である事だろう。似て非なるもの。即ち、似非だ。なぜ、彼らは我々と共に在るのか？その答えは神のみぞ知るといったところであろうか。いや、世界が労働を避け、機械に頼るように、それと同じように、人だけではもはや、成り立たなくなってしまうた世界を維持する為に産まれてきたのが人間という生き物なのかもしれない。無論、その逆、という事も考えられるが、そうであるならば、むしろ進化し切れなかった存在として、しかし、形だけは同じであるという理由から、共存という、えもいわれぬ苦痛を伴い、人は生きていくのかもしれない。

ならば、何という不公平。人は生まれながらにして、苦勞を背負い込む事を義務付けられているのか。それは一体、誰の意思によってであろう。心を通わせる事も無く、にも関わらず人と同じ待遇を求め、それを何の疑問にも思わず、かつ、自らを省みる事も無い。

人間とは何と傲慢な存在である事か。それが許されているのは、

一重に物質であるという事実と、それから成る労働、種の保存からであろう。しかし、これもまた何という皮肉。

種の保存という観点からして、それは当然の事であるかのように思われるが、哀しいかな、人間からも人は生まれ出る。そして、全くの別物であるにも関わらず、同じ教育を受け、同じ待遇を以つてあらゆる事を処せられるのだ。だが、この考えもまた、一つの疑問を生じさせる。人からも人間は生まれ、そして、又その逆もある。ならば、この世界に生まれた時点では、人も人間も変わりが無いという事になる。これは一体どういう事か？

深く考えれば、遺伝的な違い、つまり、覚醒遺伝ではないかと思われる。(もつとも、一因としてはあるが)

遺伝子とは不思議なもので、単純に考えると、父母の遺伝子を半々にして産まれてくるのが子であるとされるが、それは一世代の遺伝子である。しかし、実はその遺伝子も父母共に、そのまた父母の遺伝子を継承している訳で、正確に言えば半々どころか、これまでのあらゆる遺伝的形質を受け継ぐ訳である。だからこそ、個々に違いが生じ、それが個性となる。それが時に、一世代、或いは何世代かの時を超え、当時の人、又は、人間の遺伝的形質が現れる事がある。それがいわゆる覚醒遺伝だ。遺伝的なものを因子として考えるのなら、さしずめ、“鳶が鷹を生む”といったところか。何らかの因子が作用して、選択された遺伝子が人たるものであれば人と成り、そうでなければ、人間となるのだろうか。仮にそうであるなら、遺伝子とは人にとつて、リスクファクターにしか成り得ないと考えるべきであろう。しかし、この考えは、かつてのナチスドイツのそれとそれ程変わらないとも言える。果たしてナチは正しかったのだろうか。彼の思想は、極端な差別から成るものだ。

崇高なる血、つまり遺伝子を受け継がせ、そののみを守り、より洗練された遺伝子を作る、という骨子に基づいている。その考えを信じ、実践した結果、先の大戦で罪の無い多くのユダヤ人が犠牲となった。命を、失った。無論、言うまでもなく、それはユダヤ人だ

けではない。

どの国に於いても、罪の無い民間人の死傷者はあつただらう。戦場に投じられた多くの兵士達についても同様だ。

では、やはりこの考えは間違っているのだろうか？

しかし、世界の現状を鑑みると、それ程歪んだ思想であるとも限らないと言えるのではなからうか。アラブ世界に於けるテロリストの唱えるイスラム教然り、クロアチアの内紛然り、ソ連崩壊後の各諸国を廻る争いも然り、アイルランドの民族紛争にしてもまた然り。一体誰が先の、ナチスの提唱した血の洗練を否定出来るだらう。

とどのつまり、物質的世界であるこの世界をかき混ぜる為には、必然、多くの物質的な力が必要だという事であらう。たとえ、それが人であつても、人ではなかつたとしても。

先に述べた通り、この世界のプロトコルに縛られている我々にとつて、結局のところ、生きる為に、物質であるこの体を維持する為には、食物という物質を摂取しなければならぬ。ならば、やはりそれに抗おうというのは愚かな事であらうか。抗うというのは、食物を摂取しないというのではなく、無駄な遺伝子を除去する事に因つて、大小様々な争いを無くし、生きるという事象を単純化しようという事である。それが叶つたのなら、この社会に巢食つ悪を速やかに消去出来るだらう。ただ、そうするまでには、結局多くの血が流れる事にはなるのだが。人々が、分かつていながら、下らぬ血を、命を紡ぐのは、“それ”も漠然と理解しているからであらう。

ならば、一体人間を含め、人々はどのように現状を見ているのであらうか。

心は心、精神と同一と考えるのだらうか。しかし、その答えはとうに出ている。答えは否だ。ここで取り上げる心とは、個々に考えを持ち、それは思想にまで至るものの事を言っているのだから。

あくまでも精神とは、自我を形成する為の一部として捉えるべきであらう。自我イコール精神とは、心や感情や想いといった、人としての情操を軽んじているという証である。

情緒ならともかく、それでは発展途上にある若者と大差の無い考え方だ。

人は嘆き、もがき苦しみ、そして、涙している事であろう。社会は得て不得手等問わず、その場凌ぎの人選をし、それに因る歪を無視し、生涯を終えるまで面倒を見るといふ。その歪は、その場では小さくても、積み積もって大きくなり、目に見えない程となる。

その時泣いているのは、決まって人なのだ。無神教の人でもこう思わずにはいられないだろう。“因果応報”と。

ともかく、肉体とは何であるのか。遺伝的な考え方をしないのであれば、脳に関わりがあるのだろうか。即ち、経験と、修練である。

子供達は例外無く、学校教育というものを受ける。いや、例外は稀にあるが、そういう輩は決まって、親も子も奇妙な宗教であったり、単なる思い付きを思想であると信じている、極めて危険な人間である事が多い。無論全てがそうであるとは言いつてもいいが、ここでは細かく触れる必要は無いだろう。

問題として挙げられるのは、皆同じ教育の中で同じ事を学んで行く筈なのに、それぞれに受け止め方が違っていたり、或いは、理解出来ていなかったりと、学ぶ内容とは対照的に、入力したものに対する出力の違いが有るといふ事だ。これは多く、個性に因るのだ、という意見が過半数だが、しかし、果たしてそうだろうか。ここで既に、人と人ならざるものに別れているのではなからうか。言うまでも無く、そこから先の教育、或いは経験に基づいて変わっていく、という事も無くはない。が、やはり、初等教育の中で、ほとんどの者が行く道を分かつてはなからうか。情緒が情操へと変わるの極一部で、いわゆるその他大勢は成長を遂げずにいるように思えてならない。

そもそも、個性とは何であろうか。アイデンティティーでない事は明らかであるが、では、単なる好き好きの事ではないだろうか。特別に何かしらの違いがあるというなら話は別だが、しかし、それ

程大きな違いは無い筈だ。欲しい物があるのは誰しも同じ事であるし、嫌いな物があるのも同様であろう。つまり、個性と、自我同一性とは、即ち、アイデンティティーとは別物であるのだ。しかしながら、先に述べた通り、精神、個性がアイデンティティーを構成する要素である事は間違いない。と、すれば、やはり軽視する事も出来ないのは明らかである。

では、自我とは、それらを統合したものと考えるのが正しいのだろうか。いや、それもまた、やはり違う。それでは、心というものについて何ら触れていないのだから。

心とは、精神や、個性とは似ても似つかぬ性質を備えている。精神や個性といったものは、他者の影響を強く受け、変わっていくものだが、心は違う。何をどうしたところで変わらぬもの、それこそが心である。言い換えるなら、信念や、信条とでも言うべきか。そうして言い換えたなら、より分かり易くなるだろう。この社会を、必要の無い頓着を除いて見つめてみれば、一目瞭然だ。

ならば、この社会は、まさに地獄だ。無論、それは人にとってであるが。心は肉体に縛られ、しかし、それを拒絶する事も許されず、日々を泣き腫らして過ごす。もはや肉体とは、人にとって“魂の牢獄”であると言えよう。いや、単に“命の器”と言った方が正しいかもしれない。なぜなら、この世界に生きる者達の大多数が人ではなく、人間なのだから。

いずれにせよ、形は違えど、生きている事には変わりが無いのだから、撰取するもの達や、それらを育む世界に対しての畏敬の念、畏怖の念は、当然持たなくてはならないし、持っていないてはならない。そうでなければ、仮に在るとするなら、淡々と生きる人間ではなく、籠の中で生涯を閉じる小鳥の方が天国に召されていく事だろう。言うまでもなく、この場合、人間は地獄へと送られる事だろう。しかし、一般的に考えてみると、ほとんどの人間が地獄へ行くのは嫌だと答えるに違いない。ならば、やはり、生きている事を感じ、他者との在り方について最も力を費やし、常に努力すべきであ

るう。それは何もコミュニケーションを円滑にしようという訳ではなく、その事に因って得られる対人的な経験値を大切にせよ、という事である。

こういった事は、本来子供の時分から養っていくものであり、今更提唱する事は焼け石に水なのかもしれない。が、しかし、言わなくては解らない者が過半数を占める昨今に於いては、哀しいかな、それも仕方の無い事であると言える。

では、なぜそれを大切にしなければならぬのかと言えば、これもまたウンザリする程今更ながらな事だが、先に述べた通り、口にしなければ解らない“おたんちゃん”には、やはり言わねばならないので、あえて記すが、“心”というものを構築し、養い、成長させる為だ。これが、本来の人としての生き方であるからだ。自身にとっても、他者にとっても、これが礼儀であり、かつ、此処に生かされている理由であるからだ。その事に関しての根拠は一々示すまでも無いが、しかし、これも仮定に基づくものである以上は、やはり解説が必要であろう。

先にも述べた通り、仮に天国、地獄が在るとするなら、心を持つに至らない者達をわざわざこの世界に送る必要は無い。そういう霊は、在るべき処に留めて置けばいいからだ。

ならば、やはり、この世界は地獄なのだろうか？否、違う筈だ。陽光は等しく降り注ぎ、大地を照らし、その元で笑う子供達。時に雨に濡れる事もあるが、それも世界を生かす為の大切な役割を担っている。やがて、大いに潤った大地には多くの命が芽吹き、それを糧とする生き物達を喜ばせる。そして、それを糧として育つ者達をも喜ばせる。目では見えないものもまた然り。風が吹けば、花や木々はささやかに踊り、種によってはその事で子孫を残す。空にはオゾン層が廻り、生き物達をそつと守っている。

空は広がり、雲が自由に舞い、必要な水分を蓄え、あて無き旅を続け、気の付かぬ間に消えたかと思うと、再び現れ、訪れ、また、恵みの雨を降らす。闇が訪れれば、その先には、星々が瞬き、方位

を教えたり、単純に人々の胸に美を刻む事もあれば、それらが形を成し、神話や信教の元と成る。また、月も柔らかい光で世界を照らし、その引力に因つて、海に満ち引きを与える。すると、河の、淡水のプランクトンや成分、又、海のそれが入り混じり、そこに棲む生き物達を喜ばせる。稀に、その周期を測つて産卵をする生き物もいる。それは人とて同じであるとも言える。

季節は変わらず訪れ、生き物達をかき混ぜる。春、花咲き乱れ、蝶が美しく舞い、鳥達は麗しく歌う。夏、土中に籠もっていた虫達が、儂い命の限りに愛を育む。秋、木々は待つていたとばかりに、その葉を彩り、競い合う。そして冬、生き物達はやがて訪れる春を待ち、息を潜める。目一杯競い合った木々の葉達は風に舞い落ち、土に還る。そして、それがまた、巡り来る季節への糧となる。

常に廻り、紡ぎ、象られた命達。儂いが美しく、そして、尊い。そんな世界を、人はきつと、地獄とは呼ばない。たとえ、そこに生きる事がどれ程辛く、苦しく、残酷だったとしても。

即ち、心はやはり此処に在るのだ。時に悲観的な見方をし、何もかもが嫌になり、その果てに見出せるものが何も無かったのだとしても、それでも、人の胸の奥底には、心臓のように脈打ち、視界を埋め尽くす程の闇の中でも凜として輝くその光に、人はまた前を向く事を思い出すのだろう。

あの世、黄泉の国、冥府、地獄、イデア、様々に有る宗教、神学、神教、信教といった、数多ある考えや教えのどこにも、心は無い。在るのは、あくまでも人の中。だからこそ、人は弱く、脆く、儂く、だがやはり、強く、そして生きていくのだろう。

世界が香りよく、その姿を変えて行くように、人の心もその色合いを変化させ、生まれ出でた時より、死んで行くまでの間、滲むように移り変わり、その人を彩っていくのだ。

美しくもあり、醜くもある。だが、しかし、決して忘れてはいけないのは、その心は確かに自分であり、それこそが、自分であるという事だ。哀しいかな、その評価はこの社会に生きる人間達に依っ

て成されるのだが。

いつか、そう、いつか、出会う事が出来るかもしれない“誰かさん”の為に生きるのは、決して恥ずべき事ではない。だから、今ある自分の姿と、その“誰かさん”の笑顔を守る事の出来る自分を信じなければならぬ。それはとても難しい事かもしれないが、しかし、その為にこそ、自分は生きているのだと、胸を張って言える人は、他の誰より美しく、そして、尊い。

この乱雑を極め、混沌とした社会の中で、自身の価値観を見失わずに、それこそが心であり、自分自身なのだと言えるのは素晴らしい事ではないか。誰に疎まれ、忌み嫌われようとも、それを貫く強さと、そうして今を生きている事を感謝する事が大切なのではない。蹴離され、見捨てられようとも、いつか出会えるかもしれない“誰かさん”の事を想って、強く、強く、自らの歩を刻んで行く事が出来れば、きっと、生きるという事はそれ程苦しくは無い筈だ。。。

人よ、万人よ、人にあらぬ事無かれ。世界は、優しくはない。

人よ、万人よ、今を全てだと思ふ事無かれ。世界は、終わらない。

人よ、万人よ、罪を忘る事無かれ。世界は、人を生かすものぞ。

人よ、万人よ、世を憂う事無かれ。世界は、美しい。

輪廻の果てに何を見るのか。それは神のみぞ知るところ。到底人の想像の範疇には無い。

環を超え、たとえ神に会ったとて、それは変わる事はないだろう。

しかし、生きるという事は先に述べた通りであるが故に、幾度となく感じ、想い、恋焦がれる事だろう。

その中で、人として、この世界に生を授かったなら、それもまた、定めであると言えよう。ならば、それを貫く事でこの生に報いるべき筈である。

悲しみも、喜びも等しく、喜怒哀楽にその心を躍らせるのも、それもまた、報いる事に繋がっていくのだ。

その目には光を宿し、前を向き、空を見上げ、自らの思う通り、大

いに振舞えば良い。この世界は、それを望んでいる。

(後書き)

如何でしたでしょうか。考える処など御座いましたでしょうか。ともあれ、此れは論文の様なもので、大して面白くもなかったと思います。然し、こういったマテリアルを無視しては文学は書けません。其れは確かであると認識して居ります。願わくは、此れが誰かの役に立ちますように。其れでは、有難う御座いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7513p/>

命の器・魂の牢獄・心の在り処

2010年12月31日03時19分発行